

つらぬけば
そこには

— 4 —

有機農業家・詩人 星 寛治さん(77)

ほし・かんじ 1935年、山形県高畠町生まれ。73年に高畠町有機農業研究会を若手農家と一緒に創設し、翌年から有機農業を始める。75年に町教育委員に就任し、83～99年は委員長。元東京農大客員教授。著書に「有機農業の力」「農から明日を読む」、詩集「滅びない土」など。



有機農業の農家と産地直送販売の提携をする
消费者的見学会=昨年9月、山形県高畠町で

星たちは父親をどうにか説得し、農地の一部を有機農業用に回してもらつた。堆肥を作り、四つんばいになつて草むしり。ドロオイムシが大量に発生してほうきで追つた。

一年目の収穫は周囲の害に耐えた。

六割程度でしかなかつた。十倍にもかかつた苦労を思うと、がっかりもしたが、収穫したべつ甲色に輝く米粒は素晴らしい出来で喜びもあつた。

生物の力」と教わった。農薬や化学肥料を使わなければ、田んぼには一握りの土に十数億もの生き物が生息しているという。星らは、の田んぼの温度は、周囲と比べ三度ほど高く、冷後に大学教授から「微生物の力」と教わった。農薬や化学肥料を使わなければ、田んぼには一握りの土に十数億もの生き物が生息しているという。星らは、の田んぼの温度は、周囲と比べ三度ほど高く、冷

後には、星が就農したのは五四年。大学の文学部に進学したかったが、農家の五人兄弟の長男で、「家族を守らない」という責任感から断念した。

「バカでないか。頭の
おかしくなった連中だ」六割だった。三年目は堆肥を増やすなどの工夫を凝らしたが、冷夏に襲われた。村の田んぼのほとんどが白茶けた色に覆われ収穫は絶望的と思われた。八月下旬、星らの田導入で、コメや野菜の収穫はぐんと増えていた。めだ。周囲の収穫は例年昔ながらの農法への回帰を志向する星らは、農村中、前年の一・五倍の収穫にもたらされた「繁榮」種を得た。周囲は「奇跡に背を向ける変わり者でが起こったのか」と不思議がり、星も驚いた。

農藥、化學肥料上

この工夫を
夏に襲わ
れ思われ
る色に覆わ
んばのほと
星らの田
に変わり始
めと思われ
ては例年
落ち込む
田は「奇跡
か」と不思
い。五倍の收
穫から「微
々たる教わった。
料を使わな
一握りの土
生き物が生
度は、周囲
ど高く、冷



有機農業家・詩人 星 寛治さん(77)

ほし・かんじ 1935年、山形県高畠町生まれ。73年に高畠町有機農業研究会を若手農家と一緒に創設し、翌年から有機農業を始める。75年に町教育委員に就任し、83～99年は委員長。元東京農大客員教授。著書に「有機農業の力」「農から明日を読む」、詩集「滅びない土」など。



有機農業の農家と産地直送販売の提携をする
消費者の見学会=昨年9月、山形県高畠町で

この年、父親が出始めたばかりの耕運機を購入してくれた。農作業は以前よりもずっと楽になつた。コメと養蚕、二頭の乳牛を飼う小規模農家から、扱いをリンゴとブドウに広げて収入増を目指した。

農業基本法の制定は六年。政府は、経営規模拡大や機械化を奨励し、農家の所得を他の産業と同程度に引き上げることを目指していた。

この星の頭の中に、有機農業の考えはまったくない。「むしろ、近代農業の先兵になるつもりでした。国策に沿つて収穫を増やそうと必死でした」

りすぎたことが木に負担をかけたようだ。疑問は確信に変わった。

仲間と各地を視察し、日本有機農業研究会の一員として、樂照雄氏と出会った。

「このままでは農家は駄目になる。自給という原点を取り戻すべきだ」と諭され、有機農業に取り組むことを決意した。

までいいのか」と疑問を
覚えつつも、農薬と化学
肥料を使い続けた。

米国の科学者レイチエル・カーソン氏が六二年に著書「沈黙の春」で化学物質による環境汚染を告発していた。「このま

高畠町は「まほろばの里」と呼ばれている。山々に囲まれ、実り豊かで住みやすい所という意味だそうだ。縄文草創期の洞窟遺跡もあり、一万二千年前から人が住んでいた。古来、豊かな土地だったのだ。有機農業は、もともとある大地の力を生かすことでもある。雪深い山里に、それはある。(国)

こちら特報部

有機農業を続けて十年
ぐらいは、ぐじけそうになる自分自身、変わり者とあさける地域、近代化を推し進める国の農政との「三つの戦い」だった。

「一見、気の遠くなるような単調な作業ですが、苦役だとは思いません。歳月をかけて培った豊穣の大地は、力強い生き物。命の母胎なのです」

有機農業でつくった「有機農業を続けて十年
ぐらいは、ぐじけそうになる自分自身、変わり者とあさける地域、近代化を推し進める国の農政との「三つの戦い」だった。

</div

生きる半世

衝撃を受け
一原発事故
から連綿と築
や文化を庄
に存在 자체
た」。福島

A map of Fukushima Prefecture with the city of Minamisoma highlighted in gray. A north arrow is located in the bottom left corner.

脱原発必要なのは「脱成長」

県からは一万人以上の人
が山形県に避難した。星
たちの農作物も風評被害
にさらされた。

福島の事故後は思いを
八六年の Chernobyl さるに強くし、事故の四
リ事故後、星には「脱原 力月後に出版された「脱
発」の思いはあつた。有原発社会を創る30人の提
機農業の集会や講演など 言」で、「いのちのつな
で話題が原発に及ぶと、がりを、核の暴力で奪い
反対を訴えたが、反応は 去る権利は資本にも国家
芳しくなかつた。「科学 にもない」と訴えた。
文明を否定する遅れた考
自民党政権に代わり、



A black and white photograph of a woman with short dark hair and glasses, smiling warmly at the camera. She is wearing a dark, textured sweater over a collared shirt. In her right hand, she holds a large, round fruit, possibly a melon or a large apple, showing it off. In front of her is a woven basket overflowing with similar fruits. To her right are two large, rectangular wire-mesh crates stacked together, also containing several of the same type of fruit. The background consists of more of these wire-mesh crates, suggesting a storage or market setting.

自宅に隣接する倉庫で収穫したリンゴを手にする妻の吉田さん

よ
人は業績を残し、周り
から評価されたがるが、
永遠の存在はない。足跡
を残すことより、一步一
歩、大地を踏みしめる充
実感を得ることが幸せだ
という意味を込めた。
「小さな地球でいがみ
あい、最近は無人島をめ
ぐつて国家が情けない抗
争をしている。何億年の
宇宙の歴史の中では、け
し粒にもならない」

はてしない野道を
まわるなりゆきり歩く

星自身、詩人としても活動してきた。「願望」と題した詩の一節。

ぶろくを酌み交わして談議し、生まれたのが農村文学だという。

農作業をし、冬に英氣を
養つた。年長者と若者が
わう仕事をしながら、ど

現代は消費文化のため冬も兼業で働く農家ばかりだが、以前は春から秋に

イルなのです」
晴耕雨読一。星の目指
す暮らしがそこにある。

では、後を継ぐ者が少ない。生活は楽ではないが、大地と共に生きる暮らしへの満足感。「昔の苦しい生活に戻るのではなく、新しいライフスタイル